CLAIR SUMMARY

ヴァイマル市の文化行政の特徴

—その文化施設の概要と1999年の「ヨーロッパ文化都市」について—

CLAIR SUMMARY NUMBER 020 (Oct. 20, 1997)

Council of Local Authorities for International Relations

財団法人 自治体国際化協会
CLAIR
調査部
〒100 東京都千代田区新霞が関ビルディング19階
TEL 03-3591-5483 FAX 03-3591-5346

目　次

はじめに
I　ヴァイマルの文化施設 …… 1
II　アーティストに対する助成 …… 7
III　ヨーロッパ文化都市 …… 8
おわりに
参考文献

はじめに

ヴァイマル（Weimar、日本では「ワイマール」という表記が一般的であるが、本稿ではより原語に近い表記を採る）はドイツ中部、テューリンゲン州の中核都市で、州都エアフルトからインターシティで約 20 分の地点にある。旧西ドイツの空の玄関であったフランクフルト・アム・マインと、旧東ドイツの商工業の中心であったライプツィヒを結ぶ幹線上にあるので、交通の要所にあるともいえる。しかしながら、この一地方都市を世界的に有名にしているのは、その多彩な文化的な事象である。

もともと、北方ルネサンス美術の巨匠ルーカス・クラーナハがこの地を中心に活躍するなど、文化的地盤があったヴァイマルだが、1775 年、ザクセン・ヴァイマル公国の首都であったこの地に、領主カール・アウグスト公の招きに応じた文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテが居を構えて以来、この地はドイツ近代文化の一大収斂地となった。

文学者では他にシラー、ヘルダー、ヴィーラント、哲学者ではショーペンハウアー、ニーチェ、音楽家ではバッハ、リスト、ヴァーグナー、R. シュトラウスらがこの地を中心に活躍している。また第1次世界大戦後には、当時世界でもっともリベラルな憲法であった「ヴァイマル憲法」がこの地で採択されたが、それはヴァイマルがドイツの文化を象徴する場所であったからに他ならない。1919 年に今世紀のデザインや建築の方向性を基礎づける革新的な工芸学校であったバウハウスが設立されたのもこの地である。

これら自由主義的な文化は、第 2 次世界大戦の戦火と東西ドイツ分断の災禍を経て沈滞したとはいえ、旧東ドイツ時代にもこの文化都市は営々とその伝統を護り伝えてきた。そして 1989 年の東西ドイツ統合を機に、新たな文化的段階を迎えようとしているのである。

このレポートはロンドン事務所の美術学芸研究員、奥野克仁（現：高知県立美術館）が調査したものをまとめたものである。最後に、調査にあたり御協力いただいたヴァイマル市の文化担当官ルッツ・フォーゲル博士、ドイツ国民劇場の合唱団員で、通訳もしていただいた木村能里子さんに心からの感謝の意を表したい。

I　ヴァイマルの文化施設

ヴァイマル市は人口僅かに 6 万人の小都市だが、文化活動は現在も盛んで、以下の文化施設（主なものを抜粋）が多彩な活動を行っている。

1 博物館

ヴァイマルにある主要な 22 の博物館は、ヴァイマル古典財団(Stiftung Weimarer Klassik)により運営されている。この財団は連邦が 50%、テューリンゲン州が 40%、ヴァイマル市が 10%出資して、東西ドイツ統合後の 1991 年に設立され、1994 年にテューリンゲン州法により独立した財団法人として認可された。ゲーテ、シラーを中心とし、ヴァイマル及びテューリンゲンの作家たちの資料を保管・展示するのみならず、それらを相互に関連づけ、現代の文化事象に対応させることを目的に設立されている。従業員は 1997 年現在 446 名。これはドイツの同種の財団法人の中では異例に多い数であるとのことである。

ドイツでは連邦制を取っていることからもわかるように、各都市の独立性が高い。文化は国家ではなく、各都市が独自に担うという傾向が強いが、ヴァイマルでは国の出資率が高く、「ドイツ全体の象徴」としてのヴァイマルの文化の独自性が窺われる。さらに市の文化部門に計上された予算は全体の 6%だが、市の規模から考えると、これは莫大な金額であるといえる。また市内の文化施設に対する連邦や州の助成は、その金額をはるかに超えるものである。

(1)　ゲーテ博物館(Goethe-National Museum)

1709 年に建てられたバロック建築で、ゲーテがヴァイマルに住んだ時期の大半を過ごした「ゲーテ邸」に付属した資料館。1885 年から「ゲーテ国立博物館」として一般に公開され、現在はヴァイマル古典財団によって運営されている。(2)以下の他の博物館はここの下部組織ということになっている。

(2)　シラー博物館(Schiller-Museum)

ゲーテと親交を結んだ 10 歳年下のシラーの晩年の邸宅「シラー邸」に付属した資

料館。シラーはこの邸宅を 1802 年に購入し、3 年後に死去するまで住んでいた。1988 年に資料館が併設され、ヴァイマル古典財団の開催する展覧会の会場としても使用されている。

(3) リストハウス(Liszt-Haus)

浪慢主義の大作曲家でピアノのヴィルトゥオーゾ(名演奏家)でもあったフランツ・リストが最晩年の 1869 年から 1886 年までを過ごした邸宅。死の翌年の 1887 年から資料館として公開されている。

フランツ・リストの旧宅「リストハウス」

(4) レジデンツ宮殿(Stadt Schloß)

1000 年以上前から水城として知られ、17 世紀にイタリア・バロック様式で立て直された。1923 年から博物館として使用され、現在はヴァイマル古典財団の所有となり、クラーナハの傑作をはじめとする「ヴァイマル美術コレクション」が収蔵・展示されている。

(5) ベルヴェデレ宮殿(Schloß Belvedere)

1724 年にバロック様式で建てられた大公家の夏の離宮で、現在はロココ博物館として使用されている。

2 図書館

以下の施設も上述のヴァイマル古典財団によって運営されている。

(1) ニーチェ・アルヒーフ(Nietzsche-Archiv)

大哲学者フリードリヒ・ニーチェが狂気のうちに 1900 年 9 月 25 日に死去した家を図書館にしたもの。ニーチェの文献資料を収めている。

(2) ゲーテ及びシラー・アルヒーフ(Goethe-und Schiller-Archiv)

ゲーテ、シラーをはじめ、ヘルダー、ヴィーラント、ビュヒナー、リスト、ニーチェなど、ヴァイマルで活躍した作家の草稿約 120 点が収められた図書館。

(3) アンナ・アマリア大公夫人図書館(Herzogin Anna Amalia Bibliothek)

領主のアンナ・アマリア大公夫人によって 1761 年から 1766 年にかけて建てられ、90 万巻近い蔵書を収めている。2 万巻に及ぶ「ファウスト」の世界的コレクションで知られる。

3 劇場

(1) ドイツ国民劇場 (Deutsches National Theater)

劇場としては現在の立地に建つ 4 度目の建物。最初の建物ではゲーテが 26 年に渡って監督を務めた。「エグモント」、「マリア・スチュアート」、「メッシーナの花嫁」、「ヴィルヘルム・テル」、「ヴァレンシュタイン」、「タッソー」など、ゲーテ、シラーの古典主義期の傑作が続々と上演されている。1850 年にはフランツ・リストの指揮によって

ヴァーグナーの歌劇「ローエングリン」が初演されもしている。1919 年には「ヴァイマル憲法」が採択された場所としても知られる。1945 年に連合軍の爆撃で倒壊するが、再建されて 1948 年 8 月 28 日に「ファウスト」の上演により再開された。

以下、ヴァイマルの代表的な文化施設であるドイツ国民劇場の運営体制を略記する。

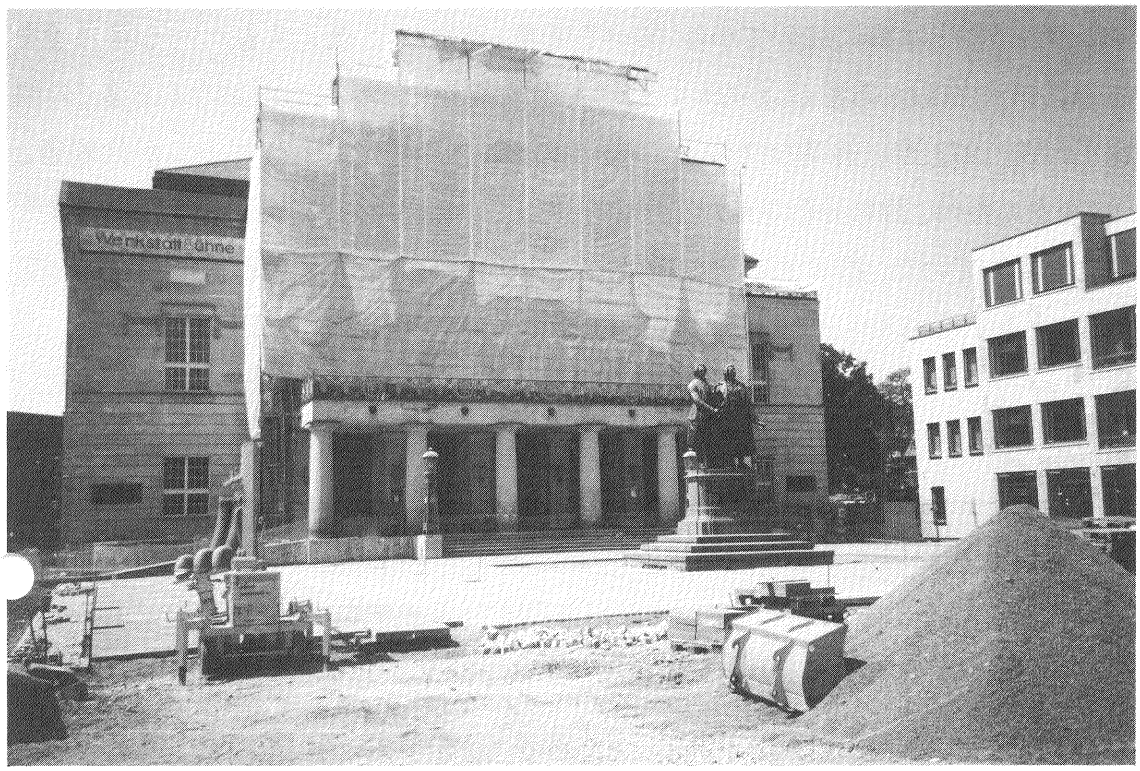
1)ドイツ国民劇場の運営

世界的に有名なドイツ国民劇場にはテューリンゲン州政府が 85%出資している。

テューリンゲンは比較的小さな州で、ヴァイマルのすぐ隣にある州都エアフルトにも立派な劇場があり、観客の争奪戦が行われているのが現状である。これは裏を返せば互いの観客を減らしあっているということでもあり、現に筆者がドイツ国民劇場を訪問したおりに上演を観ることができたリヒァルト・ヴァーグナーの楽劇「トリスタンとイゾルデ」は、演奏や演出の水準は第一級のものであったにもかかわらず、日曜の夜ということもあってか、観客はわずか 100 名足らずであった。世界的な傾向である若者の伝統芸術離れは東西ドイツ統一、自由化以後より明確化し、劇場の減収は深刻な問題となっている。

観光都市でもあるヴァイマルでは、劇場の入場者の半数近くは観光客である。従って観客のニーズに応えるのが非常に難しいとのこと。単発のイヴェントなどでは企業からの援助があったりもするが、恒常的に存在する劇場にはほとんど民間からの援助はなく、その運営は州と市からの出資だけで行われている。

昨年の総入場者数は 14 万 5 千人であった。実際に劇場を運営している現場サイドでは、例えばエアフルトではオペラだけを上演し、またヴァイマルでは演劇だけを担当するといったような分担制が模索されようとしているが、それぞれの市の上層部では都市の独立性を重視する意見が多く、劇場の機能を分散させるということに賛同を得にくい情況にある。



改装工事の進むドイツ国民劇場とその前のゲーテとシラーの像

2)インテンダント(Intendant)

ドイツの他の都市の例に漏れず、ヴァイマルでも劇場の最高権力者はインテンダントである。インテンダントは一般に「総支配人」と訳されているが、各劇場や自治体によって、その身分、職制はさまざまである。ドイツ国民劇場ではインテンダントが全部門のトップとして強大な権力を独占しており、その下にオペラ、ダンス、演劇の各監督が置かれ、さらにその下に従業員が 7 つの部門に分かれて配属されており、それぞれが異なる体系のもと給料の支給を受けている。また労働組合はそれぞれの部門毎に組織されている。

インテンダントに権力が集中することについては予てからさまざまなところで危惧の声があり、例えばベルリンの州立歌劇場「リンデン・オパー」では、芸術上の責任者である芸術監督と、支配人としてのインテンダントがその権力を 2 分している。また同じくベルリンにある、ベルトルト・ブレヒトが創設した有名な近代演劇集団ベルリナー・アンサンブルでは、インテンダントを 3 人置いて協議制で運営しようとしたが、この場合の「アンサンブル」は乱れどおしで結局成功せず、また1人制に戻したとのことである。

インテンダントは職に就いてから「学べる職業」ではなく、既に実績のある実力者を他の都市や施設から招くしかない。その人選や招致についても当然ながら多くの問題がある。1973 年、有名なヴッパータールのダンス劇場にピナ・バウシュが代表者として就任した時、誰もがその実力に疑いを持っていた。しかし 3 年後には国際的な大成功を収めていた。基本的に市の職員になるので、その任免権は市長のみが持っているのだが、短いスパンで評価することは難しいことの実例である。

ヴァイマルでのように、ドイツではインテンダントはアーチスト出身者が就任することが多かったのだが、近年業務が高度化、多様化する傾向の中で、マネージメントの部分を独立させ、経営のプロとしてのインテンダントが総括し、芸術的な部分は各ジャンルの総監督が担当する施設が一般的になってきた。先の「リンデン・オパー」もそれにあたる。その意味でヴァイマルはいまだ旧体制をひきずっているともいえるのだが、今のところ特に問題はないそうである。

II　アーチストに対する助成

ドイツにはいわゆるアーツ・カウンシルというものはなく、各都市の文化部がその役割を果たしている。美術作家に対する援助として、ヴァイマルでは 12 人が使えるアトリエを 1 ヶ月 400～500 マルクという低額で提供している。これは旧東独時代にはアーチストは国が丸抱えだった関係上、現在の新体制に移行後も、当面は自治体が面倒を見てやらないといけないということで設定された制度で、基本的に暫定的なものであるとのことである。

また市内に ACC というギャラリーの設備があるカフェがあり、市が助成している。市は ACC と共に奨学金を出したりもしているとのこと。これらの資金は 20 万マルクからなる「芸術援助」のための基金から支出されている。

IIIヨーロッパ文化都市(Kulturstadt Europas, Cultural City of Europe)

1985 年、ギリシアの文化相であったメリナ・メルクーリ女史の提案によりアテネで最初に実施され、これまでルクセンブルク、グラスゴーなどが選ばれている。今年(1997 年)は 12 年ぶりにギリシアに戻り、ギリシア第 2 の都市テッサロニキが選ばれ、来年はスウェーデンの首都ストックホルム、そして再来年には今世紀最後の都市として、ヴァイマルが選ばれている。

「ヨーロッパ文化都市」の基本的な目的は、1985 年 6 月 13 日にヨーロッパ各国の文化相によって署名された決議案によると、「その歴史的起源と現在の発展において、一般的な要素と多様性から生じた豊かさの両方によって特徴づけられた文化の表出となるであろう。イヴェントは加盟国の人々をより親密にするが、その価値は広範なヨーロッパの文化的類縁関係を考慮したものになろう。」となっている。

表 1　ヨーロッパ文化都市

年	都市名
1985	アテネ
1986	フィレンツェ
1987	アムステルダム
1988	ベルリン
1989	パリ
1990	グラスゴー
1991	ダブリン
1992	マドリッド
1993	アントワープ
1994	リスボン
1995	ルクセンブルク
1996	コペンハーゲン
1997	テッサロニキ
1998	ストックホルム
1999	ヴァイマル

ヴァイマルはこれらの都市の中で市としての規模がもっとも小さい。同じく立候補していたイタリアのボローニャやフランスのアヴィニョンを押さえ、ヴァイマルが選ばれたもっとも大きな理由は、旧東側から初めて立候補したことであったようだが、実のところ1999 年はこの小都市にとって極めて意義深い年である。この年には、ドイツの文化を象徴する存在といえるゲーテの生誕 250 年、シラー生誕 240 年、バウハウスが設立されて 80 年、ドイツが東西に分裂して 50 年、統一されて 10 年という精妙な符合が見られ、ヴァイマル市当局としてはこの機を逃すことはできなかったとのことである。公募は1993 年に行われ、ヴァイマルはめでたく当選したのだが、翌年は地方選挙のために文化的な予算が削られ、1 年間なにもできなかったらしく、その遅れを取り戻すため、現在は大車輪で準備が進められている。

もともと統一ドイツ国内では破格の国庫補助を受けているヴァイマル市であるが、1999 年に向けさらなる助成を得ることに成功し、1997 年現在、街全体で歴史的建造物を中心に大規模な改装工事が進められている。連邦と州政府と市の三者による開催であるが、実際のところ資金を提供しているのは連邦(40%)と州政府(60%)だけで、ヴァイマル市は場所の提供だけをしているとのこと。催し物の総予算は4,800 万マルクで、3 億マルクに及ぶ歴史的建造物の改装費はこれとは別枠で計上されている。

ドイツ国民劇場やゲーテ博物館を中心に、様々な催し物が計画されており、例えば「ゲーテ・コンプレックス」というテーマでまとめられたゲーテに関する催し物だけでも以下の表のとおりで、その多様性は驚くべきものである。催し物の多くはヨーロッパ文化都市を推進するために 1995 年に設立された法人、その名も「ヨーロッパ文化都市有限会社(Kulturstadt Europas GmbH)」によって企画され、運営される予定である。

表 2 ヨーロッパ文化都市事業実施予定

区分	催事名	内容
展覧会	ゲーテの遺稿	ドキュメントと草稿
展覧会	ゲーテの版画コレクション	ゲーテ邸の遺品
展覧会	ブーヘンヴァルトのゲーテのスケッチ	ヴァイマル近郊の素描
会議	ある場所の考古学	
会議	「文化的集合体」	
会議	ヨーロッパ文学とゲーテ	
集会	世界文学におけるゲーテ	
演劇	ファウスト	
街頭祝祭	万歳！万歳！ゲーテを祝う	誕生日を祝う祝祭
朗読	250時間ゲーテを読む	マラソン朗読会
歌謡	愛と憎しみの歌－ゲーテを歌う	ロック歌手による
音楽劇	おおフリーデリケ－ゲーテを愛する	レハールのオペレッタ
レヴュー	ゲーテの奉仕は神への奉仕－ゲーテを讃える	
展覧会	いずれにせよ－ゲーテを理解する	ゲーテの受容
演劇	イフィゲニー	
演劇	成されなかった旅－ヨーロッパのプーシキン	作家と旅の関係
展覧会	ゲーテ庶民と出会う	ゲーテと庶民の文化

おわりに

旧東ドイツに属するヴァイマルは、潤沢な予算と人材に恵まれ、東西ドイツ統一後に西から流入した資本を有効に活用し、旧東地区の中ではもっとも経済的に成功しているように思える。ライプツィヒやドレスデンの雑踏の中で見られたホームレスや物乞いの姿もなく、その意味ではヴァイマルは旧東地区の中では例外中の例外であるといえる。

戦前から旧東時代は、伝統の遵守ということで保たれたこの地の文化は、西からの資本の流入によって、特に商業的に大きく変貌しようとしている。博物館などの運営が、市や州の直営ではなく、より柔軟な資金運用や人材雇用が可能な財団法人により運営されていることにそれは顕著であるが、1999年の「ヨーロッパ文化都市」の各事業は、統一後のヴァイマル市の文化行政の最初のメルクマールになるはずである。これらは1999年が終われば忘れ去られるような一過的なものではなく、文化的なイヴェントとして後世に伝えられることを目的に計画されている。1990年の「ヨーロッパ文化都市」で、都市再開発を含めて成功を収めた英国グラスゴーを目標に、ヴァイマルではハード、ソフト両面で突貫工事が続けられているのである。

参考文献

地域におけるアーツ創造拠点づくり調査研究、財団法人地域創造、1995

Weimar 1999-Cultural Capital of Europe, Weimar 1999-Europian City of Culture Corporation, 1996

参考としたインターネットのホームページ（1997年7月末現在）

http://www.weimar-klassik.de
http://www.uni-weimar.de/~wis/kultur/etc/kusta.html
http://www.salve.com
http://bombast.informatik.rwth-aachen.de
http://www.culture97.gr
http://www.kultur98.stockholm.se

ＣＬＡＩＲ　ＳＵＭＭＡＲＹ既刊分のご案内

ＮＯ	タ　イ　ト　ル	発刊日
第　1　号	海外事務所の調査報告から	1995/6/30
第　2　号	海外事務所だより(1)	1995/7/10
第　3　号	英国地方団体体験記	1995/7/10
第　4　号	海外事務所だより(2)	1995/12/12
第　5　号	英国の地方財政　その未来　～ロンドン大学Ｔ．トラバース教授　講演～	1996/1/18
第　6　号	米国の移民問題	1996/2/15
第　7　号	海外事務所だより(3)	1996/2/28
第　8　号	米国の移民子女教育	1996/4/30
第　9　号	プロポジション187　～米国カリフォルニア州における不法移民問題～	1996/4/30
第　10　号	地方分権に関する法の概念～フランスにおける地方分権化の主眼と今後	1996/7/31
第　11　号	海外事務所だより（４）	1996/9/30
第　12　号	国連会議「ハビダットⅡ」報告	1996/10/31
第　13　号	欧州連合諸国における就学前の幼児教育と保育制度	1996/11/29
第　14　号	海外事務所だより（５）	1996/12/27
第　15　号	分野別・１９９６年米国政治行政の動向	1997/1/31
第　16　号	中・東欧諸国における変革の現状と将来～地引嘉博駐	1997/3/14
第　17　号	海外における行政の動き（９６年１２月号）	1997/3/14
第　18　号	クリントン民主党政権と共和党支配連邦議会のもとにおける連邦制度～	1997/3/14
第　19　号	海外における行政の動き（９７年３月号）	1997/6/27

CLAIR SUMMARY各号のタイトル、目次等の最新情報については、当協会のホームページ
http://www.clair.nippon-net.or.jpをご覧下さい